

学会記事

第24回徳島医学会賞及び第3回若手奨励賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなり、若手奨励賞は第238回徳島医学会平成20年度冬期学術集会（平成20年2月15日、長井記念ホール）から設けられることとなりました。徳島医学会賞は年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各期ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名～2名に贈られ、若手奨励賞は応募演題の中から最も優れた研究に対して1名に贈られます。

第24回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定し、第3回若手奨励賞は次の1名の方に決定いたしました。受賞者の方々には第241回徳島医学会学術集会（夏期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は次号に掲載予定です。

徳島医学会賞 （大学関係者）



氏名：元木達夫
生年月日：昭和50年9月18日
出身大学：徳島大学医学部医学科
所属：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部心臓血管外科学分野

研究内容：ピオグリタゾン投与による腹部大動脈瘤における抗動脈硬化作用の検討

受賞にあたり：

この度は第24回徳島医学会賞に選考していただき誠にありがとうございます。選考していただきました先生方、並びに関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

近年、メタボリックシンドロームと関連した心血管イベントが増加しており、内臓脂肪の蓄積からインスリン抵抗性を生じ、動脈硬化を促進していると考えられています。既にARBやスタチンにおいては多面的作用とし

て抗動脈硬化作用が注目されていますが、anti-diabetes drugであるピオグリタゾンにおいても冠動脈においてプラークの退縮が報告され、(S. Nissen, *et al.* JAMA 299, 1561-1573, 2008) その多面的作用が注目されるようになっていきます。われわれは、ピオグリタゾンの抗動脈硬化作用が大動脈レベルにおいても認められるかを遺伝子発現レベルで、また組織学的な解析から検討を行いました。今後、動脈硬化のメカニズムや抗動脈硬化作用について更なる研究を行っていきたくて考えております。

最後になりましたが、本研究を行うにあたり、多大なるご指導・ご助言を頂きました徳島大学大学院循環器内科学佐田教授、平田先生、スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

（医師会関係者）



氏名：上山裕二
生年月日：昭和42年6月2日
出身大学：自治医科大学医学部
医学科
所属：医療法人 倚山会
田岡病院 救急科

研究内容：“ER型救急”を行うことで地域のニーズに応える

受賞にあたり：

この度は第24回徳島医学会賞を受賞賜り、選考委員の諸先生方をはじめ関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

現在私達は、徳島市内の民間二次救急医療施設でER型救急を展開していくことに挑戦しています。「ER型救急」とは、救急室を受診する患者を重症度や臓器専門性に関わらず救急専従医（ER医）が診療するスタイルのことですが、ER医はすべての救急患者をまず診て、診断ならびに蘇生を含めた初療を同時並行に行いつつ、帰宅可能であれば帰宅させ、入院が必要な場合は担当する科を決定し入院治療をお願いする、という advanced triage を行います。外来診療に特化したER医が初療と advanced triage に徹することで、続けての救急受入が可能となり、「処置中」「専門外」といった受入不能例は減っていくと考えています。

今回の研究は、当院に救急科が新設されて以降の救急患者を解析することで、ER型救急医療の可能性について

て言及しましたが、各専門科医の完全バックアップがないとER医は生存しえませんし、また他医療機関との緊密な連携も不可欠です。皆様のご理解ご協力には本当に感謝しております。

今回の受賞を励みとして、今後もER型救急医療を通じて地域の救急医療のニーズに応えるべく、微力ながら努力してまいりたいと考えています。

今後ともどうぞよろしく申し上げます。

若手奨励賞



氏名：^{ぼんどう みか}坂東美佳
 生年月日：昭和58年6月25日
 出身大学：徳島大学医学部医学科
 所属：徳島大学病院卒後臨床研修センター

研究内容：進行性に増悪をきたし血管内治療を施行した右内頸動脈閉塞の一例

受賞にあたり：

この度は、徳島医学会第3回若手奨励賞に選考いただき、誠にありがとうございます。選考していただきました先生方をはじめ関係者各位の皆様に深く感謝申し上げます。

ます。

現在、脳卒中は国内死因の第3位であり、65歳以上の寝たきり状態の最大の原因となっています。今後、わが国の超高齢化が急激に進行する中、脳卒中の発症、死亡は更なる増加が懸念されます。私は神経内科、脳神経外科での研修中にSCU (Stroke Care Unit) に入院された患者さんを担当させていただき、突然症状を来し、麻痺や言語障害といった後遺症を残すことが多い脳卒中の厳しさを目の当たりにしました。その際、早期に的確な診断と適切な治療を行うことが予後を決定的なことを経験し、従来の治療法に加えて、今回の症例のように適応を考慮した上で積極的な治療に踏み込んでいくことの重要性を学びました。

この春で医師となり1年が過ぎます。医学への探究心を持ちながら臨床力を高めると同時に、初心を忘れず医師として最善の医療を提供できるよう日々精進していきたいと思えます。

研修期間のみならず、今回の発表を通して、多くの御指導、御助言をいただきました神経内科、脳神経外科の先生方に厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、日頃より暖かく御指導、御支援くださる卒後臨床研修センターの谷先生、西先生、山本先生、スタッフの皆様から御礼申し上げます。